

斎藤(福永)美津子先生退任記念座談会

出席者：

斎藤(福永)美津子(国際関係学科教授)

千葉 眞(社会科学科準教授)

新津 晃一(国際関係学科教授・社会科学研究所長)

千葉：斎藤先生は1925年1月27日に京都でお生まれになったんですね。それで、お父様が横浜正金銀行にお勤めで、お仕事の関係で海外にいらっしやった。

新津：横浜正金銀行というのは、今の東京銀行の前身ですね。小学校はどちらだったんですか。

斎藤：上海。7年いました。

新津：当時、上海のどういう学校だったんですか。日本人学校？

斎藤：そう。それに、アメリカン・スクールというのがあって。

新津：先生はどちらに行かれたんですか。

斎藤：私は日本人学校に行ったけれど、アメリカン・スクールにもちょっと行きました。日本人学校では健康優良児でした。

千葉：そうですか。インターナショナルな少女時代ですね。

斎藤：私の弟は上海で生まれ、妹はパリで生まれました。上海で生まれた弟は、アキラ。明治の明。父が上海にいた頃中国は暗くてね、この子が大きくなったら中国に何か光りをもたらすようにって、明。今毎日新聞にいます。

千葉：やっぱり国際的な家庭環境があって、そういう所にお住みになったことが、留学されたり、コミュニケーションという分野に興味をお持ちに

なったり、伏線としてそういうのがありますか。

斎藤：そうね、意識はしていませんでしたけれど。コミュニケーションに関心を持ったのは偶然なんです。

新津：それで、上海で小学校を終えられて……。

斎藤：帰国してから、女子学院に編入しました。

千葉：高等学校ですね。

斎藤：両親が外国に行っていましたからね。その時はICUにもお世話になった大塚久雄と一緒に住んでいました。

新津：そうですか。大塚先生とはどういうご関係になるんですか。

斎藤：母のすぐ下の弟。大塚家の長男です。

千葉：それで、ご両親が海外に行っておられる間、大塚先生が見られたわけですね。斎藤先生を。

斎藤：日本の学校に行かなきゃならなかったの。私の祖父がね、新島襄の弟子で、同志社出身です。祖父が何だか船底で働いて、渡米し、イェール大学で勉強をしたそうです。それで大塚の叔父なんかは、あの頃の英才教育を受けたそうです。私はそれには関係無いですけど、帰ってきて同志社にちょっと入って、それからすぐ東京に出てきました。両親がいなかったから、祖父が私たちを引き取ってくれたわけです。

新津：女子学院ですね。

千葉：三谷民子先生とか……。

斎藤：三谷民子先生は素晴らしかった。あの先生の影響が私には随分あると思っています。

新津：当時どういう雰囲気的学校だったんですか。

斎藤：クリスチャン・スクールですよ。祖父が、女の子だから外国育ちじゃいけないと言うから帰ってきたわけです。女子学院は、ミッション・スクールですが、やっぱり傷痕軍人の白衣を縫ったりして学生時代を過ごしました。それから、聖書のクラスがあり、必修でした。だからマルコ・マタイ・ヨハネと、皆覚えさせられました。試験に出るからいやでも覚え

るでしょう。今は助かってますよ。私は女子学院は非常に私には影響があったと思っています。

新津：それで、どういうきっかけで東京女子大の方に入られたんですか。

斎藤：女子学院ではあの頃はだいたい津田だとか東京女子大に進学したのです。

千葉：ルートが確立されていたんですね。

斎藤：それか、家で花嫁修行するか。

新津：当時、高校から大学に行こうとされている辺りで、先生は将来どういう人生を歩まれるか、お考えになりましたか。

斎藤：それはとってもいい質問なんです。何故かという母が、自分が最初教師になりたいと思ったのです。うちの母はピアニストだったんです。自分は教師になりたいという夢を持っていたのですが結婚したわけです。今の芸大、昔の上野ね、あの学校は結婚したら学校をやめなきゃいけなかった。それでやめたのです。だから自分の子供は一人は教師にさせたい。それをよく言っていました。それで私がなんとなくそうなっちゃったのです。だから私はね、母に一番近かったのです。母は自分の夢を私に託した。私にはいろいろ一所懸命やってくれました。

千葉：東京女子大ではどういう勉強をなさったんですか。

斎藤：今の英文科ですよ、その前身ですけど、英語専攻部というのがありました。そこで予科1年と本科3年。

千葉：先生はどんな先生がいらっしゃったのですか。

斎藤：もう亡くなりましたけれど…玉川先生…男の先生…それからね、男の先生から言うと杉村先生…それから女の方はミセス・イワモトにも習いました。バイオリニストの巖本マリさんのお母さん。

千葉：当時学長は石原謙先生ですか。

斎藤：安井哲先生から移ったところでした。それから北村孝先生もいらっしゃいました。それから天達文子先生も。

千葉：錚々たる人達ですね、今から思いますと。

新津：それでどんな勉強をされておられたんですか。ゼミなどはどんな雰囲気だったんでしょうか。

斎藤：予科の時はフォネティックス（音声学）とか、いわゆる英文学と英語のビギニングコースですよ。それから2年目の本科に入ったら戦争になって。予科の時から既に戦争になってしまったので、徴用もされました。だから勉強っていう勉強はしなかったんです。

新津：記憶に残る講義だとかですかね……。

斎藤：ありますよ、天達先生の授業などね…ゼミなどというのは無かったんです。私が本当に良かったと思うのはね、音声学。渡辺半治郎という先生。辞書などを作られました。ミセス・オダ、会話をやって下さいました。ミセス・オダは二世の先生でした。でも本当に勉強したのは正味2年だけ。どんどん空襲が始まってきましたから。

新津：そうすると、卒業される頃は……。

斎藤：私は参謀本部にいました。

新津：えっ？

斎藤：参謀本部。学徒動員ですよ。私は小さい時に外国にいたから割合と英語はできました。それでひっこ抜かれたのです。

千葉：翻訳みたいな……？

斎藤：暗号解読ですよ。

千葉：ああ、そうなんですかあ、時代を感じさせますねえ……。それで東京女子大を卒業されたのが1945年なんですね。

斎藤：そうなんです。

千葉：というと、終戦の年の……。

斎藤：9月。半年繰り上げになったのです。

千葉：アメリカの North Park College に留学されたのは、それからすぐですか？

斎藤：いいえ、すぐじゃないんです。45年は終戦の直後でしょう…9月の末に卒業式がありましたけれど、私は出席できなかったんです。軽井沢に

疎開していました。あの頃はね、アメリカ兵が来て危ないから、女の子は髪を剃って坊主にしろとか、デマがね……。

千葉：大変な時代ですね。

斎藤：ほんとよ。父が日本にいませんでしたから、疎開していました。

千葉：それで、戦争の大変なご経験を日本でされて、終戦直後ですね、アメリカに渡られましたね。当時は戦争の直後だったということもあってかなり緊張感がありましたでしょうし、日本人の留学生は殆どいない時代じゃなかったでしょうか。

斎藤：そうですね。

千葉：先生は戦後で最初の留学生という感じでしたね。

斎藤：そうね、あの時は American Military Governmental Association といって、試験をした後、アメリカにスポンサーがいる人だけを留学させてくれました。それでノース・パーク・カレッジに行ったのです。

千葉：それは何年になりましたか。

斎藤：50年。

新津：どういうきっかけで留学されようと思われたのですか。

斎藤：きっかけは、簡単でした。いい英語の先生になりたいと思ったから。それだけ。

新津：当時、もう大学は卒業しておられたわけですよ。

斎藤：はい。疎開していたのです。軽井沢に。ところが父がね、今のホーチミン市に行ってたんですが、そこで逮捕され刑務所に入れられました。軍に協力した責任者だったからということで。その頃父はどこに行ったか分からない。新円に切り替わる。兄弟姉妹は多い。お金はもう無い。その時に天達先生から軽井沢の方に手紙があって、斎藤さん、駒場高校で英語の先生をさがしてるから、英語を教えないかって。それで東京都の英語の教師の試験をすでに受けていたので、私はもう天達先生の推薦で高校の教師になりました。英語の先生をやっていました。

千葉：もう既に教えられてたわけですか。

斎藤：はい。駒場高校で教えていた時によく学校に外人が来たりしました。やっぱりいい先生になるには基本が大切だ。戦時中だったから基礎教育が抜けている。勉強しなくちゃいけないと思いました。

千葉：ノース・パーク・カレッジには、どういう関係で行かれたのですか。

斎藤：これはね、たまたま駒場にいたときに GHQ から来た人が、クリスマスでね。私が英語で簡単な賛美歌なんか教えていましたので、インスペクションに来たとき生徒の英語の歌を聞いて、「感激した」と私に言いました。今はイリノイ大学の教授ですが、その彼女が……。

千葉：推薦して下さったわけですね。

斎藤：はい、この学校は小さくていいし、シカゴは自分の両親がいるから。

千葉：なるほどね。

斎藤：ドクター・ヴァージニア・オルソンというのです。

千葉：リベラルアーツ・カレッジですね。

斎藤：そして、そこでスピーチを取りました。

千葉：ああ、スピーチのコースを取ったわけですか。

斎藤：というのは、私はあんまり勉強してないから、自分の専門というのはない。自分の専門がないなら、何か日本にはない新しい事をしようかなと思ったんです。その時スピーチのコースがありました。これは面白いと思ってやったのです。そしたら、Aが取れてね。それに大学のスピーチ・コンテストで一等になったのです。

千葉：そりゃすごいですね。

斎藤：そうしたらそのスピーチの先生が、ノース・ウェスタン大学がいいから、ノース・ウェスタンにあなた行ったらどうかということになりました。

千葉：ああ、ノース・ウェスタンといたら名門中の名門ですからね。

斎藤：今でも、スピーチ・コミュニケーションではアメリカですよ。

千葉：そうでしょうね。政治学も、いいですよ。優れた先生が沢山いますよ。

斎藤：あの時ね、コルグロブ教授がおられ、日本の憲法を作ったと言っておられました。それからエド・ホールもね。皆知っている。

千葉：当時のアメリカってのはやっぱり、1950年代で、日本と比べて格段の違いがあったと思うんですね。アメリカが輝いていた時代でしたよね。若い時分にそういうアメリカに行って、カルチャー・ショックというか、どんな感じだったのか、その辺をちょっとお聞きしたいですね。

斎藤：私は小さいとき外国にいたことはありますが…。1950年代というのは、本当にクワイエット・アメリカというか、アメリカが一番いい時だった。でも私アメリカって大きな国だなー、物が豊かだなーと思いましたね。人がいい、皆いい心を持ってるなーと思いましたね。いわゆるアングロサクソンの、人を助ける精神ですね、あの頃は教会中心の社会だったし。それで私は洗礼も受けました。

千葉：やはりそれはカルチャー・ショックみたいなものですか。

斎藤：カルチャー・ショック。私一番ショックだったのはね、例えば、私のお友達の家に行ったんです。そうしたら奥さんがご主人にね、「あなた」って言うのよね。“Take the garbage out”と命令していました。びっくりしちゃって（一同笑）。日常生活の中ではびっくりするがありましたね。男女関係や、教室内での学生達のお行儀……。

千葉：日本人であるがゆえに、苦勞されたことはありませんか。ジャップという風に言われたりとか……。

斎藤：一回だけあったわね。一回だけね。本屋の地下にいたら、女の人に来て、“You, yellow”って言いました。ジャップって言われたことは無かったけれど。“You killed my son”とか言って睨みつけられたことはありましたね。

千葉：戦争でね。

斎藤：そしたらそこにいた男の人が、こっち来なさい、あの人はちょっとおかしいんだからと言ってかばってくれました。その位しかありませんでしたね。むしろ、私が行った時代は、日本に、ああいうことしてかわいそ

うなことをしたと。日本を助けなくちゃとね。なんだかアメリカでは、原爆を落としたことに非常にアメリカ人が罪の意識を持っていたように感じました。特に教会では。私はよく教会でスピーチをしました。スピーチが終わった後牧師さんと並んでみなさんと握手をします。いつも着物を着て行っていましたから、皆珍しそうに眺めながらここ〔手〕にお金をはさんで握手をしてくれる。私はサンキューって。初め何だろうと思っていました。有り難くいただいて、着物の袂に入れるわけですよ。それで寮に帰ってくるとお友達が、今日は幾ら集まった？　なんて、からかわれた事がありました。…カルチャー・ショックというのは、もう一つありました。私が風邪を引いていて日曜日にお薬が欲しいけれどお薬屋さんが閉まっている。ルームメイトが学校のクリニックの看護婦さんだったので、彼女に、「シカゴまでお薬を買いに行くんだけど、どのお薬がいいか分からないから、ドクターに電話で聞いてもらえないか」と頼みました。彼女は“No”と。“This is Sunday.”って。あと思ったことがありました。

千葉：厳格に、日曜日を守ってるのですね。…ノース・ウェスタンといったら、エヴァンストンにありますね。とってもきれいな町。アメリカでも裕福な家庭の人達が来る大学って言われてたんだそうですね、当時。

斎藤：今でもそうですよ。私がいた頃の1950年代はね、黒人は入れなかったんです。

千葉：ああ、そうですか。そういう所で違和感というのは感じられませんでしたか。

斎藤：今でも忘れないけど。あの頃、高架の電車があったんですね、シカゴに行くとそれが地下鉄になる。エヴァンストンではその北側は黒人が住んでいました。その南側は大学町。そしてミシガン湖があるわけ。黒人は南側には住めなかった。ある慶応出身のジャーナリストの女性が黒人と結婚したのです。そうしたらその人は寮を出て北側に引っ越しました。夫婦で大学院生の住む所があったのに、そこに住めなくなってしまったので、びっくりしたことがあります。

新津：ノース・ウェスタンではどういう先生につかれたんですか。

斎藤：アーヴィング・J・リー教授はスピーチ・コミュニケーションの分野では有名な人でしたけれど私が Ph. D. コースの時に急逝されました。その次に、C. T. サイモン博士につきました。

千葉：言語学の先生ですか。

斎藤：いいえ、コミュニケーション学の先生でした。この教授はコミュニケーション学というのは、学際的に研究を進めなければいけないんだと言っていました。私は卒論のアドヴァイザーが沢山いても苦にならなくて好きなのは、この先生のお蔭なんです。「論文指導をするときは、私が今ドクター論文を指導しているようにするのだ」といろいろ教えて下さいました。指導する時はこういう風にするんだと具体的に……。だから私は本当に感謝しています。この教授が私の恩人です。それからカール・ロビンソン。この人は Speech Education の人ですけど。それからウォレス・ベイコン博士という人。それからアーネスト・レイギーとか。

千葉：そうですね。やっぱり領域的には、教育学、心理学、社会学、文化人類学、言語学などと、学際的な分野ですね。

新津：学部はどういう学部なんですか。

斎藤：スピーチ学部。School of Speech というんです。今はスピーチ・コミュニケーションと言っています。

新津：どういう構成になってたんでしょう。中は。

斎藤：その中には、Forensics ですね。Rhetorics, Rhetorical Criticism など。また、Public Speaking とか。Debate とか。Persuasion とか。それからSpeech Education というのがあった。それからInterpretation というのがあった。それから、Radio, Theatre, いわゆるドラマですね。

新津：先生はどこに……。

斎藤：私はね、一番最初にいわゆるそのフォレンジックスでそれ以後 Speech Education に移りました。だから私の博士論文は Speech Education で書きました。

千葉：それで、その時にはICUにもう既にお話があったんですね。

斎藤：一番初め1953年に、私が修士をとった時。その前に禅・コミックスという小論文を専門誌に出したのです。それをゲアハートさんというICUの教授が見て、「あなたの論文を読みました。帰国した際、お会いしたい」という手紙を下さいました。1953年の夏休みに帰国したとき、直ぐに教えにきてくれと言われました。

千葉：先生がICUの専任講師になられたのは1957年9月ですね。4年間、まだあるわけですね。

斎藤：そうです。それで、エヴァンストンに帰り、リー博士に博士論文指導をお願いしたら、彼が急死されてしまわれたのです。最後の3年、サイモン教授はSpeech Education科でしたから、Speech Educationに移ったわけです。

千葉：先生はICUに赴任されたのは1957年9月からで、コミュニケーションの分野の日本の開拓者、また同時通訳の開拓者という風に言われるようなお働きをされたわけですが、最初からそういう領域を切り拓かれたという希望をお持ちだったのですか。日本では新しい領域だったんですね、どなたもやっておられなかった。

斎藤：そうなんです。だから昭和史などに写真入りで大きくとりあげられているのですよ。

その1953年の夏に、私はドクター・ゲアハートにお会いしたとき、ICUでは、日本全国から、英語の教師を集めて講習していました。それを知らない私にゲアハートさんは、Ph. D. を取るまで待つから兎に角ICUに来てくれ、そしてICUを日本の英語教育のメッカにしてくれと頼みました。それで私は1953年にはICUに来ることが決まっていたのです。その後、トロイヤーさんが、エヴァンストンにICUのPRに来られました。エヴァンストンは教会の町です。お金持ちの人がずっとミンガンレイクに沿って住んでいるのです。トロイヤーさんが私を訪ねて下さいました。その時のことは今でもずっと私の脳裡から離れないのですが、「あなたは新しい分野を

開拓するんだから、ICU の名前を日本中に知らせてくれ。アメリカで自分が今 ICU と言っても誰も知らない。ICU の名前を売っているんだ。“Make the name of ICU known”。自分はそれであっちこっち歩いているんだ」と。ドクター・トロイヤーが言われたんですね。彼が言うには、「スピーチ・コミュニケーションは新しい分野で日本では特に大事な分野だと確信しているから、ICU の名前を轟かせてくれ」と……あの時のトロイヤー教授の ICU に対する情熱を今でもよく覚えています。同時通訳訓練は、社会の急激な要求により異文化間コミュニケーションの分野の中に位置づけ、訓練の理論を構築しただけです。

千葉：僕はプリンストンにいた頃、いろいろなコンファレンスなどで、ICU 出身の同時通訳の人に何人かに会いました。皆、斎藤美津子先生の所で最初に同時通訳のトレーニングを受けたって言ってましたね。アメリカの通訳で活躍されてる方何人かいるんですけどね、だいたい斎藤先生の所を通ってるんだなってね、僕は当時留学中に感じたことがありました。西海岸もそうなのでしょうがね、東海岸では通訳の分野で ICU の卒業生が活躍してますね。ま、僕は素人ですから、その程度しか知らなくて、ただ同時通訳は大変なことですよ、教授会で感じますけどね。これは単に英語ができてだけじゃ駄目で、本当に一つの技術、スキルが要求されますね。

斎藤：でもね、私、よく斎藤美津子っていうと同時通訳と言われるのいやなんです。今お話ししますけれど、私、同時通訳というのは幸か不幸か副産物なのです。

千葉：コミュニケーションが主って言うことですか。

斎藤：Intercultural Communication Specialist として、私は育てようと努力してきました。Intercultural Communication の事を知らない人は、ただ言葉だけを訳せば良いと思っているんですよ。それなら会話学院で間に合うんですよ。大学で教えるのはやはり、体系づけて基礎理論をきちっと教えなければなりません。私がノース・ウェスタンで受けた教育はね、千葉先生、素晴らしかったわ。私はノース・ウェスタンで受けた教育のお蔭

で、今まで自分なりに日本の状況に応じて発展させてこられたのです。だから優秀な同時通訳者を多く輩出できたと信じています。

千葉：そうですね、先日の先生の Faculty Forum のお別れ会でね、非常に感銘を以て聞かしていただいたのは、コミュニケーションが単なる技術問題じゃないんだって事をおっしゃったんですね。背後に哲学があり、やはり突き詰めれば、エロスやアガペーという愛の問題に通ずるところがあるんだと言うんですね。コミュニケーションですからやはり人と人との出会いであり、交わりであるから、そこまで考えてコミュニケーションをやられているんだなあってね、私なりに関心を持ったんですけれど。

斎藤：実は、あの時に大事なことを言い忘れて。蜜柑のやりとりの実演をしたのですが、この蜜柑はメッセージだと。コミュニケーションではメッセージが一番大事なんですよ。

千葉：蜜柑を、このようにキャッチボールされた時ですね。

斎藤：インターアクションの例を示しただけです。

千葉：それで、蜜柑というメッセージの内容が大事だということですね。

斎藤：それを言うのを忘れしまいました。とにかく20分でやれということでしたから。

新津：ICU に来られて、先生初めはどういうコースを持っておられたんですか。

斎藤：私は、ICU に来た時に、先程申しましたように、ドクター・ゲアハートが、ICU を日本の英語教育のメッカにすると。それで、私に来てくれと。しかし、ICU のユニークなコースとして、私は最初に全校の必修の Effective Speaking という科目を教えさせられました。卒業生に聞くと、そのコースは今でもとっても役に立っていると。4年生になると、一単位でしたが全員が取らなければならない規則になっていました。さっきも言いましたが、まずメッセージが無ければ駄目。私は4年生全員に Effective Speaking を教えました。でもあの頃はまだ私は、本当に日本人としてのしっかりした哲学の基礎づけを充分に持っていませんでした。ま

だ自分なりの理論も構築してなかったから。輸入学問だなんて悪口言っていた人もいましたね(笑)。それから Freshman English ね。語学科は教師全員が教えなければなりませんでした。Freshman English Program の中で、スピード・リーディングをやれということで、大学生は、速く読めるように訓練しなくちゃいけない。それでそのコースを私が出しました。どういう風にしたら速く読めるかっていうのをね。自分もアメリカでスピード・リーディングのコースを取ったから非常に楽しめました。ところがね、1963年の春にゲェハートさんが急逝されました。1962年に、宣教師だったKという教授が来られました。この人はアメリカで言語学を学ばれ、ICUに来て、学部長になり、同時に VAPP (学務副学長) であり、語学科長でもあり、三つの帽子を一度に被っていました。そして彼は、この学校は、言語学で英語を教えるんだと宣言しました。そこで私は反対したのです。語学教育というのは、学際教育だと。だから語学教育は、文法的な理論だけではないんだと。その点で彼と対立してしまいました。その後ICUの英語教育というのは言語学を主に言語学の理論でやるという風に固めてしまったのね。2, 3年後に、文学も入れましたが……。だから言語学をやっていない人は、駄目だったんです。日本語学もそうです。それで小出〔詞子〕さんなんかは、彼女は彼女で、既に日本語教育の草分けとしてやっていたのですが、言語学をまた学びにミンガン大学に行かれましたよ。現在は語学教育の分野で communicative approach がどんどん取り入れられてきています。その間も、ICU が言語学偏重で英語教育を固めていたときも、私はICUの外では英語教育などの講演を随分依頼されていました。……結局言語学偏重のカリキュラムがICUの語学教師の教育を伸ばせなかったと私は信じています。言語学だけに偏ってしまったのに、それを指摘する人はいなかった。私なんかは、ノース・ウェスタンで教育を受けてきたし、高校の英語の先生もしていたし、いろんな事を自分で考えました。……上役に楯突いて、結局袖にされたという事ですね。これが私のICUの失敗の第一回目ですよ。それでもね、コミュニケーション科は、私

がその department (専修分野) を開けました。1963年、ゲアハートさんは亡くなる前に私に、スピーチ・コミュニケーションをやるからといてくれました。語学科の学生の半数前後は継続してコミュニケーション専攻だったのです。学生数が多かったから、先生はアメリカから呼んでもらえた。学生中心の教育ができた。だからアメリカの Dr. カベッジ, Dr. バーンランド, Dr. リトヴィン, Dr. フィスター, Dr. ラムジー, Mrs. リタ・ツカヒラ, Dr. スチュアートなど、沢山先生に来てもらいました。ドクター・コンドンもその一人です。そこが ICU の素晴らしさだと思うんです。

それと、もう一つ悲しいことは、Effective Speaking のコースを、やめろという事になったの。必修コースにしてもしょうがないだろうという事で。沢山の卒業生は、今、私のあのコースを取って、とっても良かったって言ってくれますよ。あれは ICU の看板の一つだった。よその大学になかったし、初代語学科長のゲアハート先生の夢でもありました。

千葉：ジャーナリズムのブラウン先生が卒業生にアンケートを出されたとか聞いていますが。

斎藤：はい。アンケート、100人出して73人回収できて、1人だけがネガティブで、72人が全部これは続けるべきであると回答してきたそうです。私、今でも覚えています。本館で教授会があったときに、このコースは ICU の歴史だから、看板だから、続けるべきだと発言された先生方もおられました。でもやっぱり、「学生がいやだと言っている」ということで、いつの間にか必修コースからはずされました。

千葉：それは何年でしょうかね。

斎藤：それはね、んーと……70年かしらね。

千葉：紛争後ですね。直後ですね。

斎藤：そうです。あの時以来……。それから、同時通訳のコースのことなんですが。ICU に1957年に来たときに私は、教授会でいつも同時通訳やっていたんですよ。湯浅先生に頼まれて。それでまだ覚えているのは、それまで普通の英語の先生がやっていたので今度、私がやったのね。そした

ら、ああ…あれがプロ、と言語学の先生がコミュニケーションの価値が分かり、誉めて下さったことがありました。あの頃は、1ヶ月に二度教授会がありました。

千葉：そりゃ大変でしたね。(笑)

斎藤：それでね、第二回目の私の失敗。これは人事昇進についてのことです。いわゆるプロモーションの事でK教授と私は対立しました。文化の違いです。それで私は、ここは日本だから、日本人の考え方も聞いて下さいと。あなたの考え方はわかるけれど、古くて創立の時代からいる先生方も、やはり考慮の中に入れて欲しいと言ったんです。それでペンディングにされてしまいました。その時(紛争中)、ハワイのイースト・ウェスト・センターに急に行かれることになり、去られてしまったのです。その時に、K教授はそれをペンディングにして、後任の学部長に預けたわけです。そうしたら後任の先生は何も知らないから、一方的に、「前任者から申し送りがあったから、斎藤さん今日は発言しないでくれ」と学長に言わせたのです。私、その時教授会で同時通訳をしていました。通訳というのはきびしい code of ethics があり、中立にしなければならないから。そこで、私はベストを尽くしました。「もうしょうがない」とは思いましたが、発言を封じられたあの時の電話の会話は一生忘れることができません。私は敢然と立つべきだったのです。それが第二回目の失敗よ。

千葉：一つは、言語学を大事にしすぎて、学際的なことを語学科は大事にしなかったということですか。

斎藤：私が言うのは、大学院の英語教育でもそのカリキュラムは言語学中心ということにしてしまっていましたから、いろんな人の意見を容れなかったこと。それともう一つは、日本人の価値観をよく分かっていなかった外国人が人事昇進に関して絶大な決定権を持っていたから、引き継いだ日本人にはその経緯など分からなかったと思うのです。

ポジティブな面でいうと、私が Ph.D. を取って帰国してから新聞に出たりして、日本では初めてのスピーチの Ph.D. だというので、あの頃はずっ

と、毎週、私はどこかの新聞に書かない時はなかった。そういう時期もあったんですよ。藤田忠先生がICUに来られた時、「斎藤先生ってあなたですか」と聞かれたことがありました。藤田先生が言うには、「僕はいろんな企業に行ってね、ICUというと必ず斎藤先生がいるでしょと言われるんですよ」とおっしゃったことがありました。あの頃はコミュニケーションは産業界から大変な関心を得ていたのです。

それで日高第四郎先生とって、戦後初代の文部次官からこの副学長になった人がいらしたのですが、その日高先生がある時、これはもう70年代になってからですが、私が本館の一番東の角のオフィスにいたら、「斎藤さん」て言って入ってらしてね。「僕はICUは斎藤さんを伸ばしきれないんじゃないかと、何時も心配するんだよ」とおっしゃったの。先生はICUの閉鎖社会性を心配しておられたのです。しかしドクター・コンドンが9年居てくれた。この人がいい人でね、二人が団結してがんばったから、コミュニケーション科は生き延びたんです。それも、学生がこの分野に、非常に興味を持ってくれました。学生のコミュニケーション専攻者の人数が多かったのはその証拠だと思います。語学科の半数、少なくとも半数弱、多かったときは半数強になる位学生がいたわけですから。まあ、私はね、ICUという学校は、古い人を大事にしないんじゃないかという傾向があると思っています。例えば、私は、Associate（準教授）から教授になるまで12年かかったの。私ね、結婚したので忙しくなっちゃって、一冊の本にはまとめなかったけれども、その時のPublicationなんか、いろいろ書いたものは沢山あったんですよ。ある時、斎藤さんが12年もプロモートされてないから、教授会に業績を出したらどうかって、他の学科の先生方が心配して下さったことがありました。このことに関しては、いろいろな悲劇がありました。…21年間も一所懸命に働いたのについていう、あの時の悲しさ、今でも覚えてますよ……。ま、その辺がね、やっぱりチェアマンに、私が盾突いたり憎まれたりしたからでしょうけれど……。これは、皆、自業自得ですよ。だから私も、今考えてやはり人間関係は大事だと

思っています。やっぱり人間関係ね。て言うのは言葉を変えれば、私自身が傲慢だったの、ね。自分に自信持ちすぎたの。やっとながついたときには黄昏になっちゃって……やはりね、自分をもっと謙虚になれば、何も人にベコベコしなくてもいいわけ。謙虚になれば先生達のようにね、自然に人が支持してくれるんですね。

それで、同時通訳の話になるんですけど、結局、私自分が同時通訳をアメリカでアルバイトでやっていたし、市川房江先生が来られたとき、国務省に頼まれて、やったこともあったんです。それでICUで、A・マッケンジー教授のされていたあとを引き継ぎました。今度はICUのプラスの面ですけれど、ICUは本当に設備を良く整えてくれましたよ。これはだから、今の同時通訳訓練設備は日本…世界一です。コンピューターも入れて、目と耳と口を動員してやるの。間違いなくこれは世界一。ICUだけです。しかしそれは、初めは、井深さんがランゲージ・ラボ、48個のブースの設備を寄付して下さいました。

千葉：ソニーのね。

斎藤：ええ。それで、その頃は日本全国から見学に来ましたよ。それから続いてICUも凄い投資をしてくれた。一人ひとり全部ブースにテレビがあるしね。耳だけじゃ同時通訳の訓練は駄目。視覚にも訴えなければいけないのです。それからもう一つは設備だけじゃなくて助手を沢山つけてくれました。だから私は市販されているような教材は使わない。全部ICUの中で作り、授業に使いました。これはね、本当にICUだからこそ出来たと思っています。だからこのプラスの面はね、やっぱりICUですね。本当に私がなぜ同時通訳したかという英語教育には参加できないし、社会のニーズがどんどんあったし、私ばかり同時通訳をしてもしょうがない。初めは女の人は斎藤先生以外はダメと言われて出られなかったんです。しかしどんどん教育して優秀な人々を出しました。今はトップレベルの通訳者は、例えばサミットなんか女性のICU出身者が殆ど。男の人も、数人はいますけれど。

最近非常に嬉しかったことがありました。横田先生のお蔭で、7年前初めて大学院を教えさせてもらえたのです。私は大学院の学生を教えるのが夢だった…というのは大学院の学生と一緒に研究したかったのです。例えばいろんな交渉を、カンボジアの和平とか、あのマドリードの〔中東和平会議〕とか、コミュニケーション学に関係するプロジェクトを与えてグループで研究するのです。去年の秋、大学院行政学研究科で投票の結果、大学院を今年もまた教えてくれと依頼を受けました。私は投票して下さったことが限りなく嬉しかったのです。上からじゃなくて。それが本当に嬉しいのね。そんなことで、5コース教えるので、私はオフィス下さといって言いました。それと助手も、横田さんはそういうところよく配慮してくださってね、助手もつけてもらえて。

新津：5コース教えるなんて専任並ですよ。

斎藤：そうです。大学院で投票してもらったのが非常に嬉しいですね。まあ私のICUの生活というのは、一言でいえば、やはり新しい分野を開拓する人がいつも…開拓って口幅たいけれども…新しい分野を推進するときに直面する多くの喜びと悲しみを共に経験したということですね。キリストが、自分の生まれ故郷で受け入れられなかったと同じように、いろんな悲しさや寂しさ、きびしさや辛さがあったわけですよ。しかし私には先生達のように心の友がおられるし、それから新しく来た先生方がね、斎藤美津子先生がいるっていうんでICUは有名だったと、初めて会った時に言うて下さったりします。だから私はあのエヴェンストンでトロイヤーさんが、ICUの名前を日本中に知らせて欲しいとおっしゃったことに対して、少しはお手伝い出来たんじゃないかなと思っています。私は、これは開拓者の悲しみの部分だけじゃなくて、そういうことが出来たのはやっぱりICUだからだと思っていますよ。ね。世界一の設備を与えてもらって、それに助手を沢山つけてもらえたから、全部、教材は自前で作れて、それでとうとう同時通訳者の養成訓練方法は、斎藤方式として著作権を取りました。それはね、英語教育法に首を突っ込んでいたら、同時通訳の理論の

構築はできなかったかも知れません。コミュニケーション・スペシャリストとして、いわゆる Intercultural Communication Specialist として、通訳者の養成をしてきたこと。だから、コミュニケーションの理論、それこそキャッチボールよ。インターアクション。インターアクションに対するセンシティブィティが無ければいけない。インターアクションに対してのフレキシビリティが無いといけません。そこで、そういう事を自由にやらせてもらえたことで、理論も構築できたと思っています。やっぱり ICU だからだと思っています。それには何と言っても学生の質がよくなったわね。「学生。そして桜」(笑)。それからいいお友達の先生がね……いろいろ親身になって相談に乗ってくださったからここまで来られたんですけれども。そんなことで、私は ICU では開拓者の辛さ悲しさはあったんですけれども、感謝してます。ICU だからこそ伸ばしてもらえたと思って、感謝しているんですよ。だからね、英語の “Count your blessings” という賛美歌で、 “Count your blessings, name them one by one” というのがありますが、沢山の blessings をいただきました。今日は勝手なことばかり言ったんですけれど、沢山のいい事もありました。Count your blessings, name them one by one てね…。

千葉：先生のお話伺っていると ICU の歴史をそのまま生きてこられたって感じが、僕みたいな新米にはするんですけれども。現在そしてこれからの ICU に対して、先生なりに何かメッセージというか、言っておきたいことがおありだと思うんですよ。

齋藤：うーん。私はね、まず、学生の質を下げてもらいたくないということ。今まで私は学生に ICU は、自分が伸びようとすればどこまでも伸びる、伸ばしてもらえる大学だと、言い続けてきたんで、それをずっと守って欲しい、ということね。本当にやる気があれば、先生は一生懸命指導してくれる。それを是非続けて欲しい。それから、信念に基づいた勇気を持った先生がいなくなってる……。長いものには巻かれよ式。初期の頃の教授会は、素晴らしかったわよ。非常に活気がありました。今は、先生の

中で自分の信念に基づいて、勇気を持って、発言し、ICUの向上に役に立つようにする人々が沈黙を守ってきている……。

千葉：今まで見てくると、草創期の方がそういう先生方が多くいらっしやった……。

斎藤：ええ、いたわよ。沢山いましたよ。

千葉：そうですか。今は、妥協する人が多くなった（笑）。

斎藤：そうそう。あと、もう一つはね、私、外国人と日本人の教師達の関係が疎遠になり過ぎていると思います。

千葉：そうですねえ。やっぱり、前よりも溝が深まっていますか。

斎藤：深まってるわねー。これは大変なものですよ。

千葉：大問題ですね。

斎藤：例えば、教授会の同時通訳。あれを素人にやらせるのは無理よ。誤解を招く原因にもなりますよ。

千葉：コミュニケーション・ギャップになる可能性もありますね。

斎藤：私は、昔一人で長年やっていました。今はもうやらないけれど。通訳者は教授会で発言できないから、外部のプロを雇うと故渡辺先生は私にプロの人を探せと頼んだことがあり、私もすぐに手を打ちました。しかしそれきりになっちゃったのね。私も卒業生に頼んでしまって、困ったことがありました。私がもう一つ言いたいのは、事務の人達の士気低下。事務職員の人達、昔はもっと生き生きして親切にやっていた。今はね、もうこっからはあなた、こっからは私とね。時間だから駄目とか。士気が低下して官僚的になってしまっている人々が多い。これは私は問題だと思っています。

千葉：教員の方にも責任がかなりあるかも知れませんがね。

斎藤：私は無くはないと思う。要するに協力体制が出来てないのね。それには、いろんな理由がありますけどね、これは大きな問題だと思っています。というのはやはりキリスト教の大学だから、皆一応はクリスチャンでなきゃいけないっていうんだったら、もっと犠牲的な精神ね、奉仕の精神

ね、それを基本として仕事をしなくては ICU は先細りになると思うんですよね。……学生の方はね、外国人と日本人との関係は、私の知ってる限りでは随分良くなっていると思います。ただ先生の方は依然と…… ICU は一つの実験場だと思いますんでね、これからも期待しますね。

千葉：一つ一つおっしゃることが何か分かるような気がしますね。特に信念を以て勇氣ある発言と行動を示すことの大切さ。

斎藤：ICU は、日本語教育の草分けだったんですよ。それも今は無くなっちゃった。コミュニケーションも今はもう。私、本当に35年間頑張った。35年間、6か月しかリープを取らなかったの。信じられないでしょ…。それに急性胃潰瘍で胃の3分の2を切除した時、3か月休んだだけ。それでずっと頑張りました。今はもう黄昏になり駄目になっちゃったんですが……これがやっぱり人生でしょうね。ですけどね、“Count your blessings, name them one by one” てさっき言ったけれども、ICU で私は働けたからこそ、トップレベルの同時通訳者の養成もやらせてもらえたとし、コミュニケーションもやらせてもらった。よその学校では、多分出来なかったのではないかしら。

新津：先生、重要なこと一つ聞いてないんですけどね。先生のご主人のこと。

斎藤：あら、関係無いわよ。

新津：いやいや、私生活の無い人生というのは無い訳ですから。

千葉：そうですね。政治の世界とインターアクトする処にいらしたわけですから。僕も興味ありますね。

新津：だから先生、結婚なさったのはいつ頃…。

斎藤：それはねえ結婚したのは、もう三十何年前ですけど。

新津：福永氏とは、どこで、どういう巡り合いだったんですか（一同笑）。

斎藤：あのね、福田赳夫さん。あの人に、私の毎日新聞社の弟が政治部の記者としてついていたの。そしたら福田さんが、通訳をさがしていて、弟を通じて私に頼んだ。それで福田さんを知ったのよ。そしたら福田さん

が、福永さんが、奥さんを亡くして、英語の出来るような人を捜してるから、どうかということで。

新津：やっぱりコミュニケーションが取り持ちになっているんですね。

斎藤：それでね、ICUでもお世話になった大塚久雄がね。私が1953年に修士を取得して帰ってきた時に、「コミュニケーションの勉強もいいんだけど、日本に帰ってきて教えるつもりならば、日本の農村を知ってなきゃ駄目だよ」と私に言いました。農村を知るといったって…私にはね、親戚もないの。それで、それは忘れていたの。アメリカで勉強ばかりして帰ってきて、とにかく都会から始めて、地方でもいろいろ講演に行ったでしょ。そしたら、代議士と結婚したおかげで、農村の沢山の人々と知り合った。選挙というのは、人間関係ですよ。だから、人間関係がよく出来てれば…ねえ。人間関係というのは、その人が尊敬されてなきゃ駄目なの。その人が尊敬されていれば、どんな噂があろうと、選挙にはそんなに響かないんじゃないですか。

千葉：日本の政治家のコミュニケーション能力というのはいかがですかね。

斎藤：あのー、選挙区なんかはね。パブリック・スピーキングの知識を持ち、人々の心を把握することも大きなコミュニケーションの能力です。

千葉：Effective Speaking ですね。

斎藤：今、大統領選でアメリカやっているでしょう。あんな感じですよ。

千葉：政治家で、コミュニケーション能力持ってる人っていうのは、少なくなってきたんじゃないですか。

斎藤：いやー、だんだん多くなって来たんじゃないかしら。コミュニケーションといっても哲学のない人は困りますね。

千葉：どうも、貴重なお話を本当にありがとうございました。